女子大学生のファッション行動と生活意識の関連

発表者　鈴木実穂
指導教官　薩本弥生

１，研究目的

被服の社会・文化的な役割には、着装することにより自らの社会的地位を示したり､個性を表現したりするなど、他者に何らかの情報を伝達するノンバーバル・コミュニケーションの媒体としての側面がある。既存の研究には様々なものがあるが、生活意識に基づく着装行動と、具体的な視覚的イメージについて関連させた研究は見当たらない。

そこで本研究では、日常でどのような意識を持って過ごしているかという生活意識と、視覚的な着装イメージを用いた被服に対する印象評価、および場面ごとの被服選択における着装意識との関連に着目し、生活意識の度合いや着装意識の違いが視覚的イメージの評価や選択にも影響を与えるかを検討した。

２，研究方法

被験者は、横浜国立大学学生と、特にファッションへの関心が高いと予想される文化女子大学の学生で、主に１年生に対して、２００３年１１～１２月にアンケートによる調査を実施した。調査にあたっては、大きく４つの項目について尋ねた。

①生活意識要因に関する質問項目
②視覚的な着装イメージに対するイメージ評価
③②の試料を用いた、場面ごとにふさわしい着装イメージの選択
④着装行動における意識

①については、項目をファッション関心度・学生生活充実度・将来観・異性観の観点から分類して結果を集計した。②については着装シミュレーションソフトで６タイプの着装イメージを作成し、11 の形容詞対を用いてそれぞれのイメージに対する印象評価をしてもらい、形容詞ごとの因子分析を行った。③については、被験者が着る服として場面ごとに選ばれた頻度と、生活意識や学校・性別間との関連を検討した。④では、着装の際の意識を自分らしさ・活動しやすさ・女性らしさの３点についてどの程度重視するかをＳＤ法による５段階評価で訊き、生活意識や学校・性別間との関連を調べた。また、③での着装イメージの選択頻度と着装意識についても関連があるかを検討した。

３，結果と考察

3-1 生活意識要因のグループ分け：４つの生活意識要因に対する意識の強さをそれぞれ３段階に分類し、学生の分布を見た。さらに大学・男女で差があるかを平均値の差の検定で調べたところ、大学間では横浜国立大学よりも文化女子大学の学生の方がファッションへの関心が高いことがわかった。

3-2 着装イメージの評定：因子分析の結果、固有値 1.0 以上で「個性の因子」「印象性の因子」「活動性の因子」「成熟性と時代性の因子」の４つ基本因子が得られた。なお、a

の服は「個性の因子」、ｂ、ｆの服は「印象性の因子」、ｃ、ｄ、e、ｆの服は「活動性の因子」、ｂ、ｄの服は「成熟性と時代性の因子」にそれぞれ分類できた。

3-3 設定した着装場面における着装イメージの選択：６つの着装イメージのなかから選ばれた頻度を分析した結果、全体としてＢの服の頻度が最も高かった。また生活意識や基本属性間での比較をしたところ、ファッション関心度の高い学生ほど、場面に関わらずＢの服を選択する傾向がみられた。また、文化女子大学の学生の方が、同じくＢの服を選ぶ頻度が全体的に高かった。

3-4 場面ごとの着装意識：着装意識を場面によってどの程度重視するかを調べたところ、場面に関係なく最も重視されるのは「自分らしさ」であった。しかし意識項目ごとに着目すると、「女性らしさ」の意識が恋人と出かけるときには最も高くなることがわかった。

3-5 服装の選択への着装意識の影響：図１のように頻度とその意識度をプロットした散布図を作成した。

ここから、場面の効果に関係なく、Ｂの服を選ぶ学生が最も「自分らしさ」を常に重視していることが理解できた。

以上のことから、自分らしさを表現する服としてＢの服が選択されることが明らかとなったが、Ｂの服は６種の着装イメージのうち最も中性的なものと判断されている。よって被験者の学生はあまり服自体に強いイメージがない中性的な服を着ることにより、服のみによって判断されることなく自分の個性を表現しようとしているのではないかと推察される。

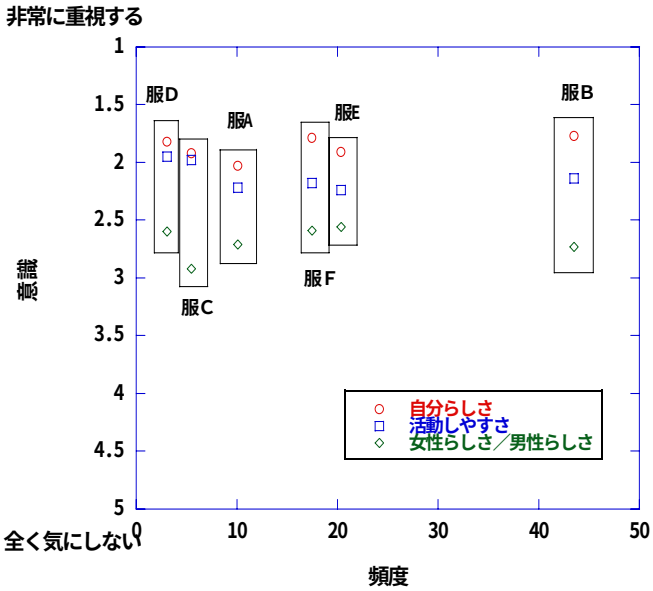

図１　選択頻度と着装意識の関係

４，まとめ

○生活意識の関心度について調べたところ、文化女子大学の学生の方がファッション関心度が高かった。

○因子分析の結果、６種の着装イメージは４因子に分類できることが明らかとなった。

○着装イメージの選択に関しては、Ｂの選択頻度が最も高かった。

○着装イメージの選択と着装意識の関連を調べると、「自分らしさ」を最も重視する学生の間では服の個性が強すぎないＢの服が選ばれていることが明らかとなった。個性の表現を服に依存していない現れと推察された。